2016年9月21日

八街キリスト教会

　　　　　　　　　**「ゼパニヤ**：**イスラエルよ、喜び叫べ」**

聖書箇所：ゼパニヤ書　3:11-17

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　先月に引き続き、ゼパニヤ書から主の御言葉を聞くことと致しました。先月は「主の日は近い」というタイトルで最初から2:3までのところを学びました。本日はこのあとになります。

　ゼパニヤ書は一言で言えば“主の日の預言”ということができますが、その「主の日」はすべての最終的な神の裁きが行われる時であり、同時に、神の国が完成し、本来のイスラエル即ち主なる神への完全な信仰が回復される時でもあります。ユダ王国第16代の王ヨシヤの時代の預言です。北王国は既に滅び、南王国の滅びも近い、と予想される時代です。

2:4から2章の最後までは諸国民への裁きが述べられます。4-7節はペリシテです。ペリシテはヨルダン川の西の地中海沿岸ですがダビデ以来イスラエルと敵対関係にあった地域です。ペリシテの中心都市ガザは今はパレスチナの支配地でイスラエル軍と民衆の戦いが絶えない場所です。その他、アシュケロン、アシュドデ、エクロンもペリシテの町です。5節にクレテ人の国とありますがクレテ島から来た者がペリシテには数多くいたからでしょう。また「ペリシテ人の国カナン」とありますが、おそらく、ここでカナンと言っているのはイスラエルの地も含めた広い意味でいっているのでしょう。6節に「ユダの家の残りの者」という表現が出てきます。この「残りの者」と言う表現は聖書における中心的な考え方の一つです。後の方にも出てきますが、その時ご説明します。

　8-11節はモアブ、アモンです。ヨルダン川の東にある国です。この地の民はアブラハムの甥のロトの子孫とされていますが、昔からイスラエルとは犬猿の仲です。イスラエルが強力な時はそれに従い、イスラエルが弱くなったときには自立する、という歴史が繰り返されています。ここでは、彼等は創世記で有名なソドムとゴモラの町のように滅びる、と言っているのです。そしてそれは彼らの高慢のためだ、と言われています。神様への高慢即ち自らの力に頼ることのためだと言うのです。12-13節はクシュ人すなわちエチオピア人とアッシリヤ人です。ゼパニヤの少し前までエジプトはエチオピア人の支配する第25王朝でしたから、ここで言われているのはエジプトとアッシリヤであり、当時の2大帝国のことを言っています。エジプトが主なる神の剣で滅ぼされます。滅ぼしたのはアッシリヤです。しかし主なる神は、今度はアッシリヤを滅ぼし首都ニネベを荒れた地としてしまいます。ナホム書がニネベ滅亡の宣告書です。14節の「ペリカンと針ねずみはその柱頭をねぐらとし、 ふくろうはその窓で鳴き、 烏は敷居で鳴く。 主が、杉でつくったこの町をあばかれたからだ」という表現は奇妙な表現であり、新改訳の表現では理解困難です。若干意訳に過ぎる感もありますがカソリック、プロテスタント共同で訳された新共同訳を見てみます。「そこには、あらゆる獣が／それぞれ群れをなして伏す。ふくろうと山あらしは柱頭に宿り／その声は窓にこだまする。杉の板ははがされ、荒廃は敷居に及ぶ」とあります。ニネベはこんな気味悪い土地になってしまう、というのです。15節にも「おごり」が出てきます。「私だけは特別だ」と言って驕った態度であったため主なる神により荒廃した地とされたというのです。この「私だけは特別だ」という表現はイザヤ書にも出てきます。47:10-11です。「あなたは自分の悪に拠り頼み、 『私を見る者はない』と言う。 あなたの知恵と知識、 これがあなたを迷わせた。 だから、あなたは心の中で言う。 『私だけは特別だ。』/しかしわざわいがあなたを見舞う。 それを払いのけるまじないをあなたは知らない。 災難があなたを襲うが、 あなたはそれを避けることはできない。 破滅はあなたの知らないうちに、 突然あなたにやって来る」とあります。「私だけは特別だ」とうそぶいていると災難があなたを襲い破滅に到る、と言われています。“私はどうしようもない人間です”といつも卑下ばかりしているのも問題ですが“私は特別だ”と言わんばかりに自慢話をするのも聞き苦しいものです。すべて神様の恵みと憐みの下で与えられたもの、と心得るのがキリスト者です。

　3章に入ると、「反逆と汚れに満ちた暴力の町」がでてきます。これはエルサレムのことです。「主に信頼せず、神に近づこうともしない」と言われています。4節では預言者、祭司も徹底的に批判されます。6節で主は義なる神であることが言われますが「不正をする者は恥を知らない」と切り捨てられています。ここでは神の義が強調されています。「恥」という言葉はヘブル語の「bo:shet」ですがその用法を見ると「恥、不面目、不名誉、卑下」というよう意味で使用され、バアルのことを恥ずべき神という言い方で使われる時もあります。神様との関係で顔を向けることができない恥ずべき状態、という意味で使用されているようです。日本人の「恥」は対人関係の中で「顔向けができない」状況を指して言っていますので、かなり見ている方角に違いがあります。ゼパニヤ書では不正をする者は神様に申し開きができない、恥ずべきことだ、という意味で使われています。

続いて7節から10節までエルサレムの回復のために主が労される様が描かれています。7節は解釈が分かれる箇所です。新改訳ではエルサレムの人々が繰り返し悪事を行ったにも拘らず、罰することはするが断ち滅ぼさない、と言われています。しかし、新共同訳では後半部分は「しかし、彼らはますます堕落を重ね／あらゆる悪事を行った」となっており、エルサレムは堕落の町として描かれています。文脈から言えば新共同訳の理解の方が素直です。8節では「主を待て」と言われています。諸国の民を集め、怒りを注ぐ、と言います。「待て」は8節で2度繰り返されていますが、ヘブル語では「ha:qa:」という動詞です。ルカ7:18に「すると、ヨハネは、弟子の中からふたりを呼び寄せて、主のもとに送り、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか」と言わせた」とありますが、ここの「私たちはほかの方を待つべきでしょうか」の「待つ」がヘブル語では同じ言葉です。ゼパニヤ書で「主を待て」と言われ、ルカ福音書では待っていた主はそこにいらっしゃる、と言われているのです。ゼパニヤ書での「主を待て」は恐るべき主の裁きの日の叙述が続いていますが新約聖書での「待つ」の後にはイエス様の救いの業（わざ）が続きます。ゼパニヤにおける希望は私たちには既に実現したものです。

　11節から17節までは本日、読んでいただきました聖書箇所です。内容的に2つに分かれます。前半は「残りの者」が保護される様が描かれ、14-17節はエルサレムの回復についての歓喜の声です。11-13節はイスラエルの「残りの者」について述べられています。まず、11節で「高ぶる」に警告を与えています。“おごり高ぶる者どもを取り去り、へりくだった、寄る辺のない民を残す”と言われています。新約聖書での「マリアの賛歌」を思い出させます。ルカ1:52-54をお読みします。「主は、御腕をもって力強いわざをなし、 心の思いの高ぶっている者を追い散らし、/権力ある者を王位から引き降ろされます。 低い者を高く引き上げ、/ 飢えた者を良いもので満ち足らせ、 富む者を何も持たせないで追い返されました。/主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、 そのしもべ、イスラエルをお助けになりました」とあります。共通した信仰告白が述べられています。12節では「へりくだった、寄る辺の無い民」の信仰的態度を描いていますが、これはイエス様のおっしゃられた「心の貧しき者」と通じています。“心砕かれた者”です。

13節の「残りの者」という表現はイザヤ書で確立した考え方です。イザヤ10:20には「その日になると、 イスラエルの残りの者、 ヤコブの家ののがれた者は、 もう再び、自分を打つ者にたよらず、 イスラエルの聖なる方、主に、 まことをもって、たよる」とあります。そもそもは、虐殺から免れた者の意味ですが、その後、神の裁きに堪えて残った「神の民」を指す言葉になって行きました。「sha:ar」という「放置する、残す」という意味の動詞から派生してできた言葉であり、「she-a:r」とか「she-e:ri:t」という言葉として使われます。日本語では「残りの者」「残された者」と訳されています。英語では「remnant」と言い、各種の聖書学に関する本を出版しているレムナント社という出版社もあります。敬虔なる人々の意味です。ペリシテの地は主の日にこのような敬虔なる者の所有にされる、と言われています。そして主なる神は「彼らの繁栄を元どおりにするからだ」と言っています。イスラエルの回復です。

新約聖書にもでてきます。ローマ書11:5では「今も、恵みの選びによって残された者がいます」とパウロは言っています。エリアの時代に、バアル崇拝を拒否した主なる神に敬虔な人々が残されたのと同様、今の時代に、キリスト者を「残された者」としている、というのです。迫害を耐え忍んだ「残された者」のことを指しています。パウロは私たちイエス・キリストを主と仰ぐ者達を、イザヤ、ゼパニヤ、エレミヤ等により継承されてきた「残された者」の系譜の中に入れているのです。ゼパニヤ書で言われている「主の日」におけるイスラエルの回復は、新約の世界において我々新しきイスラエルの回復として示されているのです。

14節から17節をもう一度お読みします。「シオンの娘よ。喜び歌え。 イスラエルよ。喜び叫べ。 エルサレムの娘よ。心の底から、喜び勝ち誇れ。/主はあなたへの宣告を取り除き、 あなたの敵を追い払われた。 イスラエルの王、主は、 あなたのただ中におられる。 あなたはもう、わざわいを恐れない。/その日、エルサレムはこう言われる。 シオンよ。恐れるな。気力を失うな。/あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。 救いの勇士だ。 主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、 その愛によって安らぎを与える。 主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」とあります。14節の最初の「喜び歌え」の「喜び」は「ra:nan」という「こおどりして喜ぶ」という動詞です。次の「喜び叫べ」と訳されているのは「ru:a」で「勝利で叫ぶ」の意味の言葉で、最後の「喜び勝ち誇れ」は「sa:maha」という通常の「喜ぶ」という動詞と「a:laz」という「勝ち誇る」という意味の言葉が続いている表現です。更に17節の最後の「喜ばれる」は「ga:yal」という「喜びで叫ぶ」と言う意味の言葉です。なんと、5種類の「喜ぶ」が出てきています。最も一般的な「喜ぶ」は「喜び勝ち誇れ」の「喜ぶ」「sa:maha」です。他の喜ぶは若干“狂気の如く喜んで踊れ、叫べ”というような強い意味合いの言葉です。

新約聖書では、この主の日の喜びを述べている箇所をいくつかあげることができます。ルカ6:23には「その日には喜びなさい、おどり上がって喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。彼らの父祖たちも、預言者たちに同じことをしたのです」とあります。イエス様の平地の説教の最初の方です。ギリシャ語では一般的な「喜ぶ」の意味の「kairo:」と「とびはねて喜ぶ」の意味の「skirta:o」が使われています。黙示録18:20では「おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神は、あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです」といわれており、ここでの「喜びなさい」は「yu:fraino:」と言うギリシャ語で「霊的喜び」の意味です。最後に日におけるバビロンへの主の裁きを喜べ、と言っています。イスラエルを支配した罪の町バビロンへの裁き、即ちイスラエルの回復を喜ぶのです。ゼパニヤ書における「主の日」の喜びはめんめんと受け継がれ、新約聖書福音書のなかにも生き続け、黙示録で再び「主の日」の「喜び」として語られています。私たちにとっては主の再臨の日の喜びです。

「喜ぶ」という言葉だけについて言えば、ピリピ人への手紙が有名です。「喜びの手紙」と言われますがその4:4「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」の「喜ぶ」はヘブル語訳では最も一般的な「sa:maha」です。またマタイ5:12「喜びなさい。喜びおどりなさい」の最初の「喜びなさい」は「sa:maha」ですが、あとの「喜びおどりなさい」はゼパニヤ書3:17の「ga:yal」で「喜び叫ぶ」意味です。実に沢山の「喜ぶ」があります。喜びの表現としての歌う、叫ぶ、踊る等によってそろぞれ「喜ぶ」の言葉があります。なかでもゼパニヤ書の3:14-17はなかでも絶品と言って良いと思います。

14節のシオンの娘というのとエルサレムの娘というのは同じことを指していますがシオンの娘はエルサレム神殿のあるエルサレムの人々と言う意味で宗教的意味合いが強い表現です。イスラエルというのはヤハヴェ信仰の共同体であるイスラエルの人々というということです。この3つの言葉は実質的には同じ人々を指しています。またイスラエルの娘という言い方の少ないですがあります。「シオンの娘」「エルサレムの娘」「イスラエルの娘」の３つの中では「シオンの娘」が最も多く使用されています。エレミヤ哀歌で多用されているので有名です。新約聖書でもヨハネ12:15「恐れるな。シオンの娘。 見よ。あなたの王が来られる。 ろばの子に乗って。」 とゼカリア書の引用の形で登場しています。

また14節の「イスラエルの王、主はあなたの只中におられる」も重要な言葉です。「あなたのただ中」です。直訳もこの通りです。この表現は17節にも出てきます。「あなたの神、主はあなたのただ中におられる」と言っています。神があなたのただ中、です。実はオバデヤ書よりあとのゼカリヤ書に二度類似の表現があります。「（主が）あなたのただ中に住む」という表現です。ゼパニヤ書以前の文書にはこのような「主があなたのただ中におられる」というような表現はありません。旧約聖書の神と人間の越えられない距離の前提では考えにくい表現です。神の愛、しかもあなたへの愛の表現です。ゼパニヤ書で初めて現れゼカリヤ書に受け継がれた、といえるでしょう。それにしても大胆な表現です。新約聖書にはルカ17:21「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」と言う表現がありますがゼパニヤ書の「主があなたのただ中におられる」と同じ意味と理解できます。しかも我々の場合は具体的な人として我々と共にいらっしゃったということです。今は復活の主として我々の只中におられます。このことはパウロがしばしば使用する「主にあって」と言う言葉と通じている、と言えるでしょう。17節をもう一度読みます。「あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。 救いの勇士だ。 主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、 その愛によって安らぎを与える。 主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」です。主なる神があなたの救いの勇士になってくれる、というのです。私たちはこの勇士になって下さった方がだれか今は知っています。せパニヤの預言はこのような深い意味のところで成就しています。

　14節の「喜び歌え」は有名なヴェートーベン交響曲第9番の「歓喜の歌」を思い出させるでしょう。この歌は当初はフランス革命の歌で現在のフランス国家であるラ・マルセイエーズのメロディでシラーの詩がドイツの学生に歌われていたのが最初ということです。その詩が「歓喜に寄せて」というタイトルで書きなおされ、それをヴェートーベンが使用した、ということのようです。直接聖書の言葉を取り上げて歌っているのではありませんが、主の日にイスラエルの復興への喜びを歌いあげる最適の歌と言って良いと思います。ドイツ語で「歓喜」即ち「フロイデ」を歌いあげるこの歌はやはり何度聞いても、直立させられる歌です。この歌詞をみると中世的雰囲気が若干はありますがこれは主なる神の御業を賛美する歌です。おそらくシラーもヴェートーベンもゼパニヤ書の3:14を心に置いていたものと思います。これがアレンジされ讃美歌にもなっています。54年讃美歌の158番です。1番の歌詞だけお読みします。「あめには御使い、喜び歌え、土には世の人、御声をきけや。わが君、この日ぞ、死に勝ちませる、生命（いのち）もまことも道もイエスなり」です。

　以上のようにゼパニヤ書はそこに表現されている言葉が、新約の時代にまでめんめんとうけつがれ、それがイエス様の言葉を通して、更には、パウロやヨハネの言葉を通して、我々に伝えられている、ということです。「イスラエルの残りの者」、「主の日の喜び」、「あなたの只中におられる」等です。

　18節から最後までは「神の約束」を述べた所であり、散らされたイスラエルを再び集める、というイスラエル復興の約束を述べています。もう解説的なことはなくただ、18節以降をお読みします。「例祭から離れて悲しむ者たちをわたしは集める。 彼らはあなたからのもの。 そしりはシオンへの警告である。/見よ。その時、 わたしはあなたを苦しめたすべての者を罰し、 足のなえた者を救い、散らされた者を集める。 わたしは彼らの恥を栄誉に変え、 全地でその名をあげさせよう。/その時、わたしはあなたがたを連れ帰り、 その時、わたしはあなたがたを集める。 わたしがあなたがたの目の前で、 あなたがたの繁栄を元どおりにするとき、 地のすべての民の間で あなたがたに、名誉と栄誉を与えよう、と 主は仰せられる」。ただアーメンと一言言って終わりとします。